

子育ては誰でも

“若葉マーク”

第1回 初めての子育て、 不安いっぱい 家族の応援の大切さ



あいち障害者センター
近藤直子

こんどう なおこ／あいち障害者センター理事長、全国発達支援通園事業連絡協議会会長、元日本福祉大学。著書に『子どもたちに幸せな日々を』(全障研出版部)など。

むときにはコーチや指導員や先輩等がエスコートしてくれますが、出産後一ヶ月ほどは実家にいたとしても、その後は母親一人でがんばる家庭が多いですよね。子どもは車やゲームとはちがって日々成長するし、日々姿が変わるので大変。自分のペースで進めてきたお母さんの暮らし、赤ちゃんの存在によって一変してしまいます。私もやたらと泣く「十日目のわが子に「私は人間ホルスタインか！」と叫んだことがあります。

厚生労働省が進めている「健やか親子21 第二次」(中間評価)では、妊娠婦がホルモンバランスの乱れや環境変化によりうつになりやすいこと、妊娠婦の自殺数は産科合併症による死亡数を上回っていることを指摘しています。

そんなお母さんが一番に頼りとするのは家族、特にお父さんですが、実はお父さんの約一割が「産後うつ」の傾向にあることも指摘されているのです。お父さんの暮らしも赤ちゃんの誕生によつて変化しているし、お母さんを支えるプレッシャーも抱えているかもしれません。勤務のきつい職場だと、赤ちゃんの夜泣きもパソコンでも仕事でも、初めてとりく

も初心者マーク。

お父さん、お母さん、誰もが初めての子育て体験。わからないことだらけです。したことがないことはできなくて、あたりまえなのに、子どもが生まれたら、日本では子育てはお母さんの仕事になることが多いですね。でもお母さん

近くに住む姉妹が乳児の子育て期にあらる人や、乳児を担当したことのある保育士・看護師・助産師といった人以外は、乳児と長い時間過ごした体験がある人は少ないですね。なにをどうしたら良いかわからないのがあります。

通常、水泳でも車の運転でもゲームでもパソコンでも仕事でも、初めてとりく

すくなるからです。

父母の周りに人の輪を

ゼロ歳のダウン症児や身体障害児を受け入れている事業所におうかがいしたとき、保健師に連れられてきた四ヶ月児の若いお母さんに会いました。保育士を中心、「親子遊び」を楽しみ、お母さんにも子どもにも笑顔が広がる教室なのに、わが子を隣に寝かせたまま表情が

ないお母さん。親子遊びのあと、先輩お母さんたちがそっと声をかけている姿に、「これからは一人ではないよ」と心中で呼びかけるとともに、子どもがゼロ歳のときから先輩と出会い、楽しいときを過ごせる「通える場」を全国に広げなければと思いました。

祖父母のつらいことばに離婚に至ったケースや、わが子を夜間に外に連れて出られずうつになつたお母さんを助けてきたのは保健師さんたち。わが子が通える場があるというだけでお母さんは「一人ではない」ことを実感し、そこでたくさんのお母さんたちと出会い、愚痴を言いい、泣き笑い、たくましいお母さんになつていかれます。

夜の「お父さんの勉強会」の後の飲み会。初めて参加したお父さんが酔っぱらつて「こんなはずじゃなかつた」と、障害児が生まれたことのしんどさに大泣きされたのを見て、お父さんこそ孤独なのではと父親支援の必要性にも気づかされました。

家族が予想外の出来事でしんどいときには、泣くことがあたりまえに保障される人の輪があれば、家族は団結していくのだと思うのです。



障害があるとわかつたとき、 家族もしんどくなつて…

生後すぐに子どもに病気や障害があるとわかれれば一層、父母はしんどいですよね。なかなか退院できないわが子、これからどうなるのかわからない不安、そうした夫婦を支えるのが祖父母を始めとした家族なのですが、祖父母も初めての体験ではパニックになることも多いようです。「わが家系には今までこんな子はないかった」「仕事で無理するから未熟児で生まれたのよ」と母親を責めたり、果ては「こんな子、外に出すな」とひどいことばを投げつけることだつてあります。お母さんはどう育てたらよいかわからぬだけではなく、自分が悪かったのではないかと自分を責めて苦しくなります。子どもの病気や障害をお母さんより先に伝えられることが多いお父さんは、自分が泣きたいのにお母さんを支えるために泣けずに苦しんだりもしています。だからなるべく早い時期に先輩お父さん・お母さんと出会えるように支えることが必要となります。先輩たちはどうやつて家族のタッグを組んできたのか、子どもにはなにが必要なのか、イメージがもちや